

ひすいの玉

小川未明

青空文庫

町まちというものは、ふしぎなものです。大通りおおどおから、すこしよ

こへはいると、おどろくほど、しずかでした。子どもたちは、そこで、ボールを投げたり、なわとびをしたりして、遊びあそました。

横町よこちようの片かたがわに、一軒けんの古物店こぶつてんがありました。竹夫たけおは、

いつからともなく、ここのおじさんと、なかよしになりました。

おじさんは、いつも、店みせにすわって、新聞しんぶんか雑誌ざっしを読よんでいました。まだ、そう年としよりとは思われぬのに、頭あたまがはげていました。

竹夫たけおは、そのそばへ腰こしかけて、なにか、おもしろいものがありはしないかと、店みせの中なかを見みまわしました。ほんとうに、いろいろのものが、ならべてありました。しかし、たいてい名なを知らぬも

のばかりです。それに、むかしのものが多く、いまはつかっていない品しななので、どうして、これがいいのか、ただ見るだけでは、美しいというよりか、むしろきたならしい感じかんがしたのでした。

「おじさん、あれは、女おんなの顔かおなの。それとも、男おとこの顔かおなの。」と、竹夫たけおが、柱はしらにかかっている、面めんをさして聞ききました。どちらにも見みえるからでした。

「あの、お能のうの面めんか。女おんなの顔かおさ。あれは、なかなかよくできているのだよ。」

こう、おじさんに聞きくと、なるほど、どことなくけだかさがあり、それでいて、いまにもっこりわらいそうです。

「やさしくて、いいお顔かおだね。」

「わかるかな。は、は、は。」と、おじさんは、きげんが良かった。

竹夫は、このぱつとしない、ねむるような店の中に、さがしだされるのを待っている、美しいものがあるのを、感じました。

「あの、りゆうがかいてある香炉の頭は、ししの首なんだね。」と、台にのっている、そめつけの香炉を、竹夫はさしました。

おじさんは、にこにこして、新聞を下におき、めがねごしに、竹夫を見つめながら、

「きみは、なかなかいいものに目がつく。感心だ。いまから、研究心をもって、古い美術に興味をもてば、いまに目があるくなる。まことにいいことだ。これは、中華民国の二千

年ねんばかりも前まえのものだよ。」と、おじさんは、手てをのばして、わざわざ香こう炉ろをとりあげ、竹たけ夫おにわたしました。

「よくごらん、めったに、こんな、胸むねのすくようなものは、見みられないから。」と、ひとりで、おじさんは、感かん心しんしました。

香こう炉ろにかいてあるりゆうの色いろも、また、ししのすがたも、いきいきとして、新しん鮮せんで、とうてい二千年ねんもたつとは、思おもえませんでした。それに、いいにおいがするので、竹たけ夫おは、ふたを鼻はなにあてて、どんな人ひとが、この香こう炉ろを持もっていたかと、はるかな過か去こを想そう像ぞうしたのでした。

「おじさん、いいにおいがするね。」

「この香こう炉ろをだいに持もっていた人ひとが、たいたのだが、よほどの

いい香こうとみえる。」

おじさんは、竹夫たけおから、香炉こうろをうけとると、また、もとのごとく、台だいの上うえにのせました。そのそばに、ニツケル製せいの、足あしの長ながい、青あおいかさをかぶった、ランプがありました。

「おじさん、あのランプもめずらしいの。」と、竹夫たけおが聞きくと、

「いや、あれは、さほどめずらしくない。わしなども、まだ、子こ

どものころは、ランプのあかりで、勉べん強きょうをしたものだ。」と、

おじさんはいって、竹夫たけおの聞きくことを、めんどろくさがらずに、

一つ、一つ、答こたえました。竹夫たけおが、おじさんを、いい人ひとだと信しんじ

たのもむりはありません。

ところが、ある日ひのこと、竹夫たけおの家いえに 来らい客きやくがありました。

その人は、竹夫の父や母にむかつて、こんな話をしていました。
「およそ、こつとう屋ほど、人のわるいものはありません。たと
えば、人からなにか買うときは、いい品物でも、わるくいつて、
安く買いとるし、また、人になにか売ろうとするときは、わるい
ものでも、めずらしい品だとほめそやして、高く売りつけて、法
外のもうけかたをします。しよせん、気の弱いわたくしど
もの、やれる仕事ではありません。」と、いったのでした。

これを聞いたとき、竹夫は、おどろかずにはいらませんでした。
なぜなら、あの、自分のすきなおじさんも、やはり、そんなわる
い人間であろうかと思つたからです。そして、おじさんは、う
ちのおとうさんや、学校の先生などのようなしようじきな人

とは、ひとつにみられない人間にんげんであろうかと、考えかんがざるをえなかつたからでした。

もし、来客らいきやくのことばに、まちがいがなければ、竹夫たけおは、自分の頭ぶんあたまと目をうたがわねばなりません。それから、四、五日にちというもの、かれは、煩悶はんもんにすごしたのです。

しかし、真実しんじつのない批評ひひょうとか、よりどころのないうわさなどというものの、無価値むかちのことが、じきわかるときがきました。それどころか、いままでに、まだふれる機会きかいのなかつた、真の人しん人間のとうとさというものをし知ることができたのです。

竹夫たけおは、いつものごとく、おじさんの店みせへ、遊びあそびにいきました。ちようど、おじさんのなかまもきていて、世間話せけんばなしをしていまし

た。

そこへ、外そとから、一人ひとりの女おんながはいってきました。そして、はずかしそうにして、ふところから、紙かみにつつんだものを出だして、「これを買かっていただけませんか。」と行って、おじさんに見みせました。

おじさんは、めがねをかけなおして、紙かみの中なかのものを取り出だして、ながめました。それは、うす青あおい色いろをした、いくつかの玉たまのつながりでした。しばらく、見みいるばかりで、だまっていました
が、

「この根ねがけをお手てばなしなさるんですか。いいひすいですな。」
と、おじさんは、ためいきをもらして、いいました。おそらく、

こんないい品しなをはなさなければならぬ人ひとの、心こころを思いやっただのでしよう。おじさんは、あかずに、ひすいをながめていました。

「はい、それは、母ははのかたみなんです。母ははがだいじにしています。わたくしも、こればかりは手てばなさぬつもりでしたが、こんど、どうしてもつごうがございました。」と、女おんなの人は、心こころのさびしさをかくすごとく、あとのことばを、わらいに、まぎらせました。

戦争せんそう後、わたくしどもの家庭かていは、たいていびんぼうとなりました。いままで持もっているものも売うりはらって、くるしい生活せいかつのたしにしたのは、ひとり、この女おんなの人ひとだけではありません。おじさんが、それに同どうじょう情じょうしたのは、もとよりです。

「性しょうといい、色いろあいといい、また、大きおおさといい、申しぶんのない品しなです。まあ、めずらしいでしょう。おくさん、これなら、いくらも、高たかく売うれますよ。」

こう聞きくと、女おんなの人は、ちよつとうたがいの色いろをみせました。なぜなら、すこしでも安やすく買かいとするのが、ふつう商しょう人にんのすることであるのに、なぜこの人ひとばかりは、しようじきにほめるのか、これを、どう理り解かいしていいか、まよつたのです。

「わたくしが、いただいてもよろしいのですけれど、こんな品しなを、お手てばなしなさるあなた**の**ばあい**を**考かんえ**ます**と、もつと大おおきい、信用しんようのある店みせへお持もちなさいまし。そうすれば、いつそう高たかく売うれます。わたくしが、ご紹しょう介かいいたしますから。」と、おじ

さんは、しんせつにいいました。そして、いたわるごとく、女の
 人のようすをながめました。どこのおくさんかしらないけれど、
 つまさきのやぶれたたびをはいて、さむそうでした。

女の人は、おじさんが、損得をわすれて、いつてくれる心が
 わかったので、思わず感激して、

「ありがとうございます。」と、礼をいったのでした。そして、
 頭をあげたときは、目の中がうるんでいました。

やがて、女の人は、おじさんから、紹介をもらつて、店を
 出ていきました。

それまで、そばにいて、いつさいのありさまを、見たり聞いたり
 した竹夫は、ゆめからさめたような気がしました。なかまも、

おなじく感じたのでしよう。やはり、ためいきをして、

「あんたという人は、よつぽどかわっている。みすみすもうかるものをもうけないなんて。」といいました。それは、おじさんを非難ひなんしたようであるが、うらは、みあげた行為こういを感嘆かんとんしたようにもとれたのでした。

「私わたしは、わがままものだが、まちがったことはしたくないと思っおもてね。」と、わずかに、おじさんは、いつものしずかなちようしで答こたえました。

「しようじきものの頭こうべに神かみやどるといふから、あとで、いいことがあるだろう。」といつて、なかまは、立たちあがりました。もう、暗くらくなりかけて、風かぜができました。

竹夫^{たけお}は、きょうの話^{はなし}を、
かたつて聞^きかせようかと、
道^{みち}をいそいだのでした。
どう、おとうさんや、おかあさんに、

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「幼年クラブ」

1949（昭和24）年1月

※表題は底本では、「ひすいの玉《たま》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2020年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ひすいの玉

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>